



「社会経営ジャーナル」論文

論題=Title	東南アジアの徒然草ーなぜ日本とタイは独立を保持できたのかー
著者=Author	池末 成明
雑誌名=Citation	社会経営ジャーナル,2014, Vol.2, p.3-12
発行者 = Publisher	放送大学社会経営研究編集委員会
ISSN	2188-1073
巻 = Vol.	2
ページ = pages	3-12
発行年=Issue Year	2014
URL	http://u-air.net/SGJ/pub/20141101J-lkesue.pdf

東南アジアの徒然草

—なぜ日本とタイは独立を保持できたのか—

池末 成明

2013年10月末に長期出張でバンコクに到着してから、4月末で半年になる。このエッセイは、バンコクに来て、「つれづれなるままに心にうつりゆくよきなしごとを、ひぐらしFACEBOOKに向かい、そこはかたなく書き付くれば、あやしうこそ物狂ほしけれ」となりし戯言の断片を、新たに加筆し、編集したものである。皆さまに、エッセイの半分を占める脚注も含めて、楽しんでいただければ幸いである。

なお、このエッセイは、タイやラオスで見聞きしたことをベースに、私見を書き連ねたものであり、学術的な裏付けも客観的なデータの裏付けにもとづくものではない。加えて、私は、このエッセイに登場するタイやラオスを愛する者であり、両国に対する批判の意図はない。事実誤認に関するご指摘を歓迎するとともに、両国の国民感情の機微に至らぬ点など、いかなる批判や評価も甘受する覚悟である。また、言うまでもなく、すべての文責は私にある。



左写真：タイのバンコクの戦勝記念塔にて車は右から来る。



右写真：ラオスのヴィエンチャンにて車は左から来る。

タイは左、ラオスは右

海外に出ると戸惑うことは数あるが、車道を渡るときの戸惑いは、何度渡航しても消えることがない。車道に最初の一步を踏み出すおり、日本では右から来る車が海外では左から来るからだ。ヒヤリとしたことも1度や2度ではない。「右見て左見て右見て渡る」と教えられたことが、習慣として私の体によほど染みついているのだろう。幸い、タイでは車は左側通行だ。だから、最初の一步を踏み出すとき、タイでも車は右から来る。日本と同じで安心だ。しかし、なぜ日本やタイでは車はイギリスと同じ左側なのだろう。バンコクに来てから長くナゾだった。

タイに長期出張で来て4カ月ほどたった3月10日、タイの隣国ラオスに行く機会があった。その首都ヴィエンチャンはバンコクから飛行機で1時間、同じタイのチェンマイより近い。そのヴィエンチャンの車道に立ち、私は戸惑った。ラオスでは車は右側通行で、車

は左から来るのだ。

その夜、メコン川の河岸に立つラオスのヴィエンチャン王朝最後の王の像の下、ラオス国立大学の若い教師に、この理由を聞くと、彼はこう答えた。

「ラオスはフランスの植民地だったからです²」。

その瞬間、私の中の点と点、線と線がつながった。

つながった点と点そして線と線

幕末、日本は官軍と幕軍が戦闘した。戊辰戦争である。戊辰戦争は1868年から1869年まで続いた2年に満たない内戦で、官軍はイギリスの、幕軍はフランス、幕軍についた奥羽越列藩同盟・会庄同盟はプロイセンからの支援を受けていた。大きくは日本を東西に割った内戦で、官軍が勝利、日本を再統一し、その後も日本は独立を保った³。

一方、当時インドネシア半島でも内戦があり、タイはイギリスの、ラオスとカンボジアはフランスの支援を得ていた。結局、タイは独立を保ち、タイ統治下にあったラオスとカンボジアはフランスの植民地となった。だが、タイは独立を保った。

この2つの別の国の話は、よく似ている。結局、日本の内戦もインドシナ半島の内戦も列強の代理戦争でしかない。すなわち、列強は自らの血を流さず、武器を売り、アジアの同胞の血でアジアを汚し、その対立軸の中の間隙を突いて支配をもくろんだ⁴。しかし、列強の代理戦争をもってしても、日本とタイは独立を保持した。その理由として、教科書的に言えば、例えば、日本においては内戦が早期に終結し、列強が日本に干渉する大義を失ったし、タイにおいてはイギリスとフランスの兵士の血を流す直接対決を避けるために、タ

イを緩衝地帯にしたからである。他にもさまざまな説がある。

だが、こうした説だけでは、私はどうしても納得がいかない。列強が、簡単に富をあきらめるはずがない⁵。もっと別の理由があるに違いない⁶。なぜ日本とタイは独立を保持できたのか。これは奇跡だ。そこに謎がある。

ところが、この謎は、この4月あっさり解けてしまった。酒盛りの席で、現地の日本人たちが教えてくれたのである。だが、その話をご理解いただくために、少し時間をさかのぼり、私がバンコクにきたばかりの2013年10月に時計を戻したい。

チュラロンコン大学

私のタイでの業務は、タイの各大学との共同研究のコーディネイタである。そのパートナーのひとつに、チュラロンコン大学がある。チュラロンコン大学は、タイ最高峰の大学であり、日本人はチュラロンコン大学をタイの東京大学と言う。



左写真：チュラロンコン大学

中写真：チュラロンコン大学工学部シンボル歯車

右写真：チュラロンコン大学のシンボルカラーはピンク

チュラロンコン大学の工学部電子工学科のヘッドであるデイビット先生から伺った話によれば、「チュラロンコン大学工学部は100年の歴史がある。チュラロンコンは、タイ人に今でも慕われるタイ王国チャクリー王朝のラーマ5世国王の幼名である。チュラロンコン大学は、ラーマ5世の名前を大学の名前に冠しており、ワチラーウット王つまりラーマ6世によって設立された。チュラロンコン大学の教員も学生をそのことに誇りを持っており、チュラロンコン大学を**The Pillar of King**と呼んでいる⁷」。一体、タイ人に慕われているチュラロンコン大王とはどのような方だったのだろうか。

幕末から明治時代のタイーチャクリー改革

実は、多くの日本人は、チュラロンコンの幼少期を知っている。ミュージカル映画「王様と私」⁸に出てくるタイ⁹の王の最年長の王子がチュラロンコンなのだ。”**Shall we dance**”のミュージカルだと言えば、思い出す方も多いただろう。映画では王の死の床で、チュラロンコンは王位継承され、これからのタイ国の近代化の在り方を子供ながらに演説する。あるタイ人によれば、この映画は、タイでは上映禁止であるが、大学でこの映画を題材に英語で講義を受けたという¹⁰。

チュラロンコンは、裕福なブンナーク家の管理の下、わずか15歳での即位後すぐに欧米を視察、帰国後、タイの改革に着手する。この改革を王朝の名前にちなみチャクリー改革という¹²。そこで、チャクリー改革の近代化の内容と目的を、時系列にこだわらず、詳細は別の機会に紹介することとして、ここでは手短かに要約しておこう。

まず制度面では、チュラロンコンは、中央集権国家化¹³、軍の近代化、官僚制の導入、議会制度の前身となる国政協議会と枢密院を設

置、教育制度の拡充¹⁴そして奴隷解放¹⁵などを進めた。次に、インフラ面では、鉄道の敷設¹⁶、1984年の市電敷設、道路の整備、1914年に始まる水道設備設置、電話業務¹⁷や1983年には郵便事業の開始などがある。また、在位の初期の頃には、タイで初の新聞ダルノーワートの発行にも関わった¹⁸。

ラーマ5世がタイの近代化を進めた結果、列強はタイを保護または指導すべき国という大義を失い、また英仏の直接対決を避けるためにもタイを緩衝地帯として独立させておくことになった。一方、ラーマ5世は当時ビルマとマレーシアを支配したイギリスにマレー半島の一部を、ベトナムを支配していたフランスにラオスとカンボジアを割譲し、自国の独立を保つ政治的手腕も示している。

チュラロンコン大王の誕生日は1853年9月20日、ペリーが浦賀に入港した7月8日より3か月後である。その在位は1868年10月1日から1910年10月23日で、日本の明治時代1868年から1912年とほぼ重なる。このことから、私は、チュラロンコン大王一人で、日本の明治維新の誰もが知っている志士すべてに相当するほどの偉大な指導者だったと本気で信じている¹⁹。

もうすこし時代をさかのぼろう。チュラロンコン大王の父モンクット²⁰は、1851年即位し、ラーマ4世となる。その3年後、チュラロンコン誕生の翌年1854年、冊封体制を廃止した²¹。つまり清への朝貢を止め、官号を拝領して中国皇帝と君臣関係を結んでタイの統治の許しを得る制度を停止したのである²²。その翌年の1855年にイギリスと通商貿易に関するボーリング条約を締結、貿易を開始し、米の輸出を開始した。王は、この米の運搬のため運河を建設している²³。モンクットは、道も整備した。この道を「ニューロード」（ジャルンクルン通り）と言うが、その名に反してバンコク

で一番古い整備された道である。また、モンクット王は、タイの独立のためには、西洋文明を取り入れ近代化が必要だと信じ、多数の外国人を雇い国の近代化を開始する。その中の一人が、イギリスからアンナ・レオノーウェンズという女性教師である。王はアンナを家庭教師として採用、女官や子供に西洋教育を行った。このときの様子が、『アンナとシャム王モンクット』という小説となり、前述したように『王様と私』で劇作化され、ミュージカル映画となった。

ラーマ4世の在位は1851年から1868年の17年と短い。マラリアで急死したという。ラーマ4世の在位の期間は、日本の幕末にあたる。

以上、駆け足で日本の幕末から明治時代にあたるタイの国王の仕事を紹介したところで、話をもとに戻したい。

明治時代の日本とタイの交流

私は、酒盛りの席で、そこに集まった日本人の方々に、伺った。

「ここまでタイと日本の歴史を調べ、比較検討しましたが、なぜ日本とタイが独立を保てたか、わかりません」。

皆さんのお話は、こんなところから始まった。お名前を明かさなという条件で、その発言の一部を要約する。

「最初、イギリスとフランスは、タイを南北の長く残し、ここを緩衝地帯にする計画でした。ところが、タイは横太りの形で国を残せたのです。その理由として、国境沿いの官僚が張り付き、戦闘が始まっても、官僚は粘って国境に張り付き、逃げようとしなかったという研究があります²⁴。結果、列強は国境紛争につけ入ることが難しくなったようなのです。この官僚は国境に張り付いて逃げないと

いう助言は、日本人の助言らしいのです。しかし、驚いたな。池末さんはタイの素人でしょう。そのナゾはごく最近提供されたばかりです。タイ研究者の最先端の研究テーマですよ」。

ここからは、話を私の言葉で整理して書いていこう。

イギリス・フランス両国は、インドシナから昆明へのルートがコスト高であることと、マラリアに悩まされ、1896年にタイを両国の緩衝地帯として残すことが定められた。結局、列強の本音は、列強の財布の事情と病気が原因だったのだ。その後、タイは英仏との交渉で、ほぼ現在の領土領地を得る。なぜタイが南北に細い領土ではなく、東西に広く領土を確保できたのか。なぜ日本は独立を守れたのか。その理由は、前述したように、多くの日本人が、タイ人と交流し、またチャクリー改革に関わって、タイ王室と官僚に助言していたからだ²⁵。一方、タイ人も日本人に明治の国造りに助言していた。両国は列強から国を守るための情報交換をしていたのだ。

三四郎

タイにきて、明治時代の日本とタイの交流を知った後、私は、NHKの「坂の上の雲」でみた明治の人々とりわけ夏目漱石の姿を何度も思い出すようになった。次の夏目漱石の『三四郎』の文章は、当時の有識者や指導者の心情が反映されているように見え、この気概が日本の独立を堅持させたのでないだろうか。少し長くなるが引用しよう。

「我々は西洋の文芸を研究する者である。しかし研究はどこまでも研究である。その文芸のもとに屈従するのは根本的に相違がある。我々は西洋の文芸にとらわれんがために、これを研究するのではない。とらわれたる心を解脱せしめんがために、これを研究して

いるのである。この方便に合せざる文芸はいかなる威圧のもとにし
いらるるとも学ぶ事をあえてせざるの自信と決心とを有している。

我々はこの自信と決心とを有するの点において普通の人間とは異な
っている。文芸は技術でもない、事務でもない。より多く人生の根
本義に触れた社会の原動力である。我々はこの意味において文芸を
研究し、この意味において如上の自信と決心とを有し、この意味に
おいて今夕の会合に一般以上の重大なる影響を想見するのである。

社会は激しく動きつつある。社会の産物たる文芸もまた動きつつあ
る。動く勢いに乗じて、我々の理想どおりに文芸を導くためには、
零細なる個人を団結して、自己の運命を充実し発展し膨脹しなくて
はならぬ²⁶」。タイ人もこの三四郎が聞いた演説者の気概を持っている。
タイと日本の独立はこのような気概に支えられていたのではな
いだろうか？

エピローグ

バンコクの国際空港は、どこにでもある国際空港だが、ヴィエンチ
ャンの国際空港は日本の地方の空港とよく似て、懐かしい雰囲気がある。
タクシーでホテルに向かう途上、ヴィエンチャンのこじんまり
した町並みとメコンの河川敷が目優しい。宿泊したホテルがまた、
小さなお洒落な建物である。オーナーらしき方に伺うと、この
建物はイギリスの小学校だったという。ラオスは、また人々が優し
い。タイの優しさに惚れる日本人が多いが、ラオスはそれ以上である。
私は、すっかりラオスに惚れこんでしまった。

その夜、ラオス国立大学の若い教師は、メコン川の川岸に立ち、
右手で対岸のタイを指さすラオスのヴィエンチャン王朝の最後の国
王アヌ王の像の下でこう語った。

「ラオス人は、この国王を敬愛しています」。

彼の言葉を聞きながら、私は勤務先の秘書との会話を思い出していた。
秘書はタイ北部のイサンの出身だが、ラオス語はタイのイサン
と同じ種類のタイ語だという。列強は、こうした国々を分裂させて
しまったが、古くから、ラオスやカンボジアとタイの関係も微妙で
ある²⁷。どちらの国も愛する私は複雑な思いに悩まされる。



左写真：ラオスで宿泊したホテル

右写真：右手で対岸のタイを指すアヌ王

彼は、この像へのお参りの仕方を教えてくれた。階段の下で靴を脱
ぎ、階段を昇る。像の前に膝まずき、手を前に出し、手のひらを下
にして、頭を下げる。手のひらをあわせて、像に願いを願う。この
王は、神になったのだ。私は、ラオスに来る機会を得たことをアヌ
王に感謝し、この国の人々が幸せに暮らすこと、そしてアヌ王の右

手がラオス国民を代表して、タイ国民との握手を求める右手とならんことを祈った²⁸。

注

1 もし学術的な裏付けや客観的データの裏付けをとるのであれば、ここに書いたことは一生かかっても調べつくすことは不可能であろう。

2 もうひとつラオスに来て、ここはフランス領だったと痛感したことがある。どの店のフランスパンもクロワッサンもうまいことである。ラオスの旧王都ルアンパバーンのクロワッサンはもっとうまいという。

3 私が小学生の頃から不思議に思っていることがある。幕末から明治維新にかけ、日本を開国させた米国の影が消えるのは何故だろう。1861年に始まり1865年にかけて、米国でも南北戦争という内戦がおきている。戊辰戦争は南北戦争の後に起きた内戦だが、米国のその後の終戦処理が大変だったのかもしれない。1890年の米国の国勢調査局長による「フロンティアの消滅」は、まだ20年も先のことであるが、ペリーの浦賀入港に先立ち、アメリカの開拓民は太平洋に到達しており、ゴールドラッシュもおきている。1823年に発表されたヨーロッパ大陸とアメリカ大陸の相互の内政不干渉を主張したモンロー主義の影響も考えたことがあるが、列強のアジアでの覇権争いもモンロー主義にもとづき不干渉だったかどうかまで調べきれていない。

4 インドシナ半島を分断する外交は、今でも使われており、中国の動きで整理すると、ミャンマーとベトナムは反中。カンボジアとラオスは親中、その他の国はバランスをとっている。

5 株主保護の大義にもとづく最近の日本の企業の言動は、大義にもとづくアジア支配の当時の列強の言動に似ていて、その言動が貧富の差を拡大した。本来、貧困を解消するはずの経済学も「経済の国際化の帰結だ。サミュエルソンがそう言っている」と語る。経済の国際化は、いわば国の間で偏在していたコップの中の泥と水をバケツに入れて、がらーりがらりとかき混ぜて、バケツの中で泥と水に分けることである。そこにはアダムスミスの道徳論も、マーシャルの暖かい心も、ウェバーの倫理も存在しない。一方、情報通信による産業の融合は、既存の産業を消滅させる。このサミュエルソンの悪魔は、今度は産業を超えて国際的なレベルで貧富の差をさらに拡大するだろう。だが、同時に、この動向は、サミュエルソンの悪魔を超えて、富の拡大と再分配を図る共生社会の出現を図る機会でもある。私の研究の目的は、情報通信による産業の融合による共生社会に相転移させる動的な構造を発見することにある。私はエコシステム（生態系）の枠組みを調べることから始めている。私は、経済学には無知で経験もないが、それゆえ恐れるものもない。

6 強者となった中国の領土や領海を犯す膨張戦略が良い例である。中国の膨張戦略の根底には、巨大な国を維持するに必要な経済的な便益も強い動機だろうが、おそらく強者が潜在的に持つ周辺への不安があり、その国境における自らの地位が安定するまで、剛柔さまざまな活動を行うだろう。日本の世論は、さながらかつての三国干渉のような様子だが、これは日本を戦争に駆り立てた戦前と同じ誤った道に日中両国を向かわせるだろう。そのことは、日中双方になんの国益ももたらさない。一方、韓国の竹島の主張は、大統領の竹島上陸で、超えてはならない一線を超えてしまった。こうした中韓の言動は、日本に対してだけでなく、タイに夜店を歩いても毎夜起

きていることであり、国際会議の舞台でも見かける。故に、国際社会は、自国の利益と人間関係と個人的な事情で決まる世界ではあるが、日本政府や民間の地道で忍耐強い努力に、暗黙の共同戦線を敷いてくれているようにも思えてならない。

7 デイビット先生は、この後、チュラコン大学のカラーがピンクであること。だから大学のスクールバスの色もピンクであることなど、チュラコン大学のさまざまなお話をしていただいた。

8 ミュージカル映画「王様と私」では、元CIA工作員のジムトンプソンが、タイシルクを提供し、これをきっかけに欧米を中心に成功して、タイシルクを世界に普及させた。ジムトンプソンは、その後、マレーシアで消息を絶ち、行方も生死も不明である。松本清張はこの事件を題材に『熱い絹』を書いているので、ご存知の方も多いただろう。また、映画にも登場する家庭教師アンナの息子は、長じてタイ王室の王女を結婚し、貿易会社を作って、今でもその会社が存続しているというが、詳しいことはわからない。聞くことはもちろん、知ってはいけないタブーかもしれないと言われてこともある。

9 明治時代のタイはシャム王国と呼ぶべきだろうが、ここではタイと呼ぶ。なおシャムは、正式にはセイヤムと発音し、駅の名前にもなっている。また、シャム、シャン、アッサムは、おそらく同じタイ族同士のタイ語に語源があると思われる。

10 チュラロンコン大王は、タイ人の中では、お守りにも使われるほどの方である。毛沢東の写真も中華人民共和国の中国人の間ではお守りに使われているという。日本の神社の祭神も実在の人物であることも多々あり、アジア人の信仰の在り方として興味深い。

11 情報をくれたタイ人の名前と大学名は伏せることをご容赦頂き

たい。この原稿はネットでも掲載され、世界につながるからだ。この国では王室を批判する者は不敬罪に問われる。禁止されている映画をみせた大学の教師もタイ人も、その元学生たちも王室を批判しているわけではないが、咎めをうけるかもしれない。ネット時代は、某国を批判した文章を書き、某国で逮捕され拘留されても文句は言えない。このことを、私は、小中学生向けのメルチメディア振興センターのeネットキャラバンのインターネット講座でも語っている。ネットは言論の自由のない国にもつながっている。それが国際化というものだ。日本や欧米のロジックが通用する世界を作ることが国際化ではない。

12 一方で、改革とは、いつの時代も既得権を持つ人々の財産と権限を奪い、新たな富裕層や既得権者層を作るものでもある。明治維新の日本の士族階級で起きたことでもあった。

13 日本の廃藩置県に相当する改革を行い、タイを中央集権国家に改組した。タイは、地方の独立性が強く、地方同士の戦闘やタイ領にも侵攻が頻発した、こうした内戦は列強の干渉を招き占領されるリスクがあった。そこで、地方の知事や周辺の王族を廃し、モンthon (州)、ムアン (県)、アンパー (郡)、タンボン (町)、ムーバーン (村) という階層を持つ中央集権に改組した。日本の廃藩置県は、年貢の廃止に伴う武士階級のリストラと地方勢力の弱体化が主たる目的であったが、タイの地方自治改革も、地方の勢力を弱体化させ、または滅亡させることが目的であった。このため、王室は、これに反発する地方勢力に対抗する軍部の近代化も進めた。この結果、王室の権力と財力の安定を図られた。日本では廃藩置県後も藩主がそのまま中央政府の指名で知事になった県もあったが、タイでの状況は不明である。

14 教育制度は、近代国家や富国強兵のための人材育成の機関の設立だけでなく義務教育も導入した。高等教育では、現在のチュラロンコン大学の前身が内務省付属「文官研修所」の官僚養成機関であり、法律関係では現在のタマサット大学の前身である法務省の研修所がある。チュラロンコン大学が東京大学に相当すると言われることと対比して、タマサット大学は多数の政治家を生んでいることから日本の早稲田大学に当たると言う日本人もいる。教育の近代化は、初等中等教育にも及び、大正時代までかかったようだが、日本の寺小屋に相当するお寺の僧が無料奉仕で提供していた教育は、徐々に姿を消していった。

15 チュラロンコン大王は、タートという奴隷やプライという苦役に従事する地方の人民を解放した。この結果、タイは野蛮国の汚名を晴らし、不平等条約の改善に寄与した。奴隷はブンナーク家や貴族の重要な財産であり、この改革によって貴族の財力を弱体化させることも、奴隷解放の目的であった。人道的な理由が大義ではあったようだが、それだけでは改革の動機としては成立しない。これは南北戦争での奴隷解放においても同様であった。なお、南北戦争では、南は、サミュエルソンに似たりカードの比較優位論と自由貿易論を展開したが、北は保護貿易を訴えた。アダムスミスのアメリカ独立のメリットを説く論点も瓦解した。

16 バンコク＝ナコーンラーチャシーマー間までの鉄道を敷設した。この歴史は、ひじょうに興味深いが、別の機会に紹介したい。

17 タイの電話の歴史は、筆者の博士論文でのメインテーマのひとつであるが、現時点では、全く情報を得ていない。

18 チュラロンコン大王は、1873年に、ヤング・サイアムという青年右翼組織を組織し、この『ダルノーワート』というタイでは初め

での新聞を発行し、ブンナーク家や副王を批判した。このため、副王がクーデターを企てるが未遂に終わる。以降、大王は、中央集権化や奴隷制廃止等の方法で改革を進める。

19 チュラロンコン大王の妻の数は160人以上、子供の数は77人と歴代最高である。

20 この王の名前を冠した大学もあり、キングモンクット大学という。

21 チュラロンコン大王の父モンクット大王が即位する前、モンクットが30代であった1840年、清はイギリスとのアヘン戦争で敗北した。このことは、アジア諸国にとって衝撃で、モンクットの意識も一変しただろう。その14年後、チュラロンコン大王誕生の翌年1854年、冊封体制を廃止しているが、これは清から脱却し、脱亜入欧を果たすきっかけとしたのであろう。このモンクットの決断で思いだすことは、福沢諭吉の脱亜入欧である。脱亜入欧は、日本がアジアではなくなることを言いたいのではなく、タイの改革で見てきたような、冊封体制に代表される中華思想の呪縛からの脱却と西洋的近代化のことではないか。

22 某国は今でも中国の冊封体制を堅持しているように思える。

23 勤務先の近くの移民局の側の屋台で見た運河を通過する船を見たとき、私は、アダムスミスの国富論での風景を思い出した。運河に浮かぶあの船は、「コンピュータも運んでいると思う」と屋台のタイ人が語った。

24 当時は、後の世界大戦のように、大量兵器と大量の兵士を消耗する時代ではなく、戦争も武士道や騎士道が残るのどかな時代であったことも幸いしたのだろう。

25 ここで、当時、タイと交流のあった日本人を5人ご紹介したい。

1882年(明治15年)に日本の皇族である東伏見宮はバンコクを訪問し、国交関係樹立についてタイ王室と高官と会談、1887年(明治20年)には「日暹修好通商に関する宣言を調印、翌年1888年に批准書を交換し、条約が正式に発効して、正式に国交を開いている。タイ王室と日本の皇室の親密な外交は、ここに始まる。

また、タイと列強との不平等条約の改善のためには、近代的な法典の完備と国内諸制度の近代化が必要だと考え、欧米諸国へ留学生を派遣する一方、欧米の専門家多数を顧問として招聘し、国内改革に努めた。その法律顧問団の首席は日本人の政尾藤吉であった。政尾は当時外務大臣だった早稲田大学の創設者である大隈重信の命を受け、イギリス・フランス両国がタイを緩衝地帯と決めた1896年にタイの法律顧問としてタイに渡り、タイの近代刑法や社会法の草案を執筆する。その後大審院判事を3年間勤め、1912年には国王より欽賜名(プラヤー・マヒトーンマヌーパコン・コーソクン)を下賜され、1913年に日本へ帰国する。タイの赴任期間は実に16年に及んだ。その後、1921年に、タイ駐在公使としてタイに再び赴任し、同年8月脳溢血で急客死する。そして、現在も政尾藤吉はタイ近代法の父として教科書で紹介される日本人である。

チュラロンコン大王は、欧州だけに依存した教育だけでなく、日本からの教育も必要だということで、イギリス人の女性教師に代わり、1904年に日本人女性教師の安井てつをタイに招く。安井てつは、バンコクの王宮とワット・ポーの近くにタイ最初の女子教育専門学校であるラーチニー女学院を設立、校長となって1904年から1907年の3年間、河野清子と中島富子ともに、名門貴族の女子200人を指導した。ラーチニーとは皇后という意味である。

安井てつは、タイを離れた後、イギリスに留学し、日本に帰国後1918年(大正7年)に同年創立した東京女子大学の学監となり、1923年(大正12年)、初代学長新渡戸稲造の意向を受けて、第2代学長に就任した。1943年(大正18年)には、東洋英和女子校校長事務取扱となった。安井は、その全生涯を女子教育に捧げた教育者だった。

26 この三四郎の言葉は、国際化のための、TPP、SOX法、IFRSなどを進めるコスモポリタンにも、これに反対するナショナリストにも、耳に少し痛い話かもしれない。しかし、この心意気は、激変する時代の中で、今こそ通用するのではないか。

27 ラオスは当初タイの保護下にあり、アヌはタイのラーマ2世の副王としてビルマの侵攻に対応するなど忠誠を尽くし、ラオス王の兄の死亡後はラオスの王位にもつく。しかし、ラーマ2世死亡後、列強の侵攻や国力の増強をみるや、1829年にラオス独立をかけたタイとの内戦をおこすが、敗戦し、死亡、ヴィエンチャン王朝は滅亡する。この事件の発生時期は、ラーマ3世の時代であり、チュラロンコン大王は生まれていない。このアヌ王の像が建立された後翌年の2011年、タイで大洪水が起きた。アヌ像周辺の両国の国境の町では、アヌ王が暗殺された祟りだと信じられており、タイ政府はラオス政府にこの銅像の向きを変えて欲しいと外交ルートを正式に要請したという出所不明な情報もある。また、このアヌ王は右手でタイを指しているため、タイ人が銅像の右腕を切り落としに来るといふ情報もある。その背景には、タイとラオスの歴史と、今も続く両国の複雑な政治と経済の関係がある。

28 住む場所が変わると毎日が新鮮で驚きに満ちている。そして、日常のなんでもないことのひとつひとつへの驚きが、タイやアジアや

日本の深いところつながっている。エッセイでもかまわないというありがたいお話であったので、今回は車道を渡るときの発見が、思わぬところで日本とタイの独立の謎につながっていることを書いてみた。